

《史料紹介》

九州大学法学部所蔵「下総国安食村通船留書」

内田 龍 哉

ここに紹介する「下総国安食村通船留書」（以下、「通船留書」とする）は九州大学法学部図書室所蔵に係る古文書集で、昭和八年（一九三三）に九州帝国大学が購入した法制資料である。その内容は、表題の示すとおり、下利根川付きの下総国埴生郡安食村（栄町）の近世後期の水運に関する文書集で、同大が購入するまでの経緯は定かでない。また、その存在は丸山雍成氏が一部引用されたことで初めて明かにされたものであり、房総地域史の研究者にとって未見の史料と言えよう。⁽¹⁾そこで、その一部を翻刻掲載することとしたい。

「通船留書」は、和綴じ冊子の形態で、柿渋の横縞模様の表紙に「下総国安食村通船留書十二（巻数一筆者注）」と記した題箋が貼付されている。数量は十二冊で、いずれも十丁から二十丁程度である。また、一部に異筆の文書も含まれるが、いずれも原文書から転記されたもので、貼り紙や下げ札等は一切なく、保存状態も良好である。ところで、安食村は元禄十四年（一七〇二）から佐倉藩領に、ついで享保八年（一七二三）からは淀藩領となった利根川沿いの村で、

九州大学法学部所蔵「下総国安食村通船留書」（内田）

元禄郷帳で村高一五四五石余り、天保郷帳では一六七一石余りであった。いわゆる元禄の河岸吟味では、御城米回漕河岸として書き上げられ、幕府の公認を得ている。⁽²⁾また、天明六年（一七八六）の差出帳にも渡船場三箇所、高瀬船九艘、舫艇二艘とあり、天保十三年（一八四二）の農間渡世書上にも質屋五軒、旅籠屋三軒など農間余業が六十六軒も記されていることから、幕領からの年貢米回漕に加え、成田参詣と鮮魚陸継ぎの河岸として繁栄していたことが分かる。⁽³⁾

ところで、「通船留書」所収の文書の多くは、文政十三年（天保元年、一八三〇）以降における安食村と印旛郡竹袋村木下河岸（印西町）との紛争に関わるものである。木下河岸は、利根川沿いに広がる河岸で、これも元禄の河岸吟味以来の特権的な河岸場であった。⁽⁴⁾また、この年には、幕府川船役所が下利根川筋を廻村し、耕作船や沼内船に対しても極印打ちを断行し、木下河岸問屋武助ほかを川船統制機構に組み込んでいる。⁽⁵⁾

これに対して、安食村は安永・天明の河岸吟味において河岸問屋株の設定に漏れたものの、銚子、鹿島方面からの鮮魚荷物を陸揚げし、惣深野を横断する新道を経て行徳河岸へ継ぎ立てる河岸であった。また、最近では常陸国鹿嶋郡子生宿の鮮魚継ぎ立てに関する文書が紹介されたことから、安食村は木下河岸に対して「新河岸」行為をはたらくほか、水戸藩領の物資流通と深く結びつくことで、木下河岸に対抗していたことが判明するのである。⁽⁶⁾

〔参考〕天保十二年（江戸出荷生荷物出荷につき）一札之事

一札之事

水戸御領生荷物運送之儀、安食村より江戸順道宜敷近道有之候ニ付、御領分南浜之荷主中より御役所様江御願被立候ニ付、水戸様御役所より貴殿方江荷宿御申付ニ相成候趣及聞候故、則御当領浜之儀ニ付、我等村方生荷物津出シ候次第可指送候間、追々着船ノ節ハ相改ノ上、江戸表江早刻継立候様取計可被成候、人馬附出等ニ而拔荷等無之様取扱方御頼申候、万一荷物継送りニ故障人等も有之候ハ、大津浜荷主我等方江御指向候様可断候、然上ハ故障ニて少シも指支難儀等一切相掛ケ申間敷候、為念書付相渡置申候、仍而如件
天保十二年

丑二月廿九日

水戸御領

常州多賀郡大津浜

先船庄屋

与惣衛門[㊦]

安食村荷宿文内殿

同村御役人衆中

右によれば、安食村の文内と言う者は、同村が「江戸順道宜敷近道」であることから、水戸藩領南浜からの鮮魚荷の荷宿を勤めるように

水戸藩役所から命じられていたが、天保十二年二月には、水戸藩領北端に近い多賀郡大津浜（茨城県北茨城市大津浜）の鮮魚荷主の与惣衛門からも、鮮魚荷物を積んだ川船が安食村に着船した節は、江戸表へ即刻継ぎ立てるよう求められた⁽⁷⁾。この場合、大津浜を出立した鮮魚荷物は昼夜兼行の人馬による陸送で、陸前浜街道から飯沼街道に入り、鹿嶋郡子生宿でいったん人馬を継ぎ替え、鉾田付近の北浦湖岸で川船に積み込まれ、利根川を経て安食村へ水揚げされるかと考えられる。さらに、安食村で駄賃稼ぎの者に引き継がれた鮮魚荷物は、下総台地を横断して行徳河岸に到達し、再び川船に積み込まれて、江戸市中へ運ばれるのである⁽⁸⁾。このことは、常総地域に広範に見られる駄賃稼ぎ層の活動が、利根川・江戸川間の回廊地帯におけるような、河川運輸の隘路を補完するものとどまらず、廉価迅速を利用して長距離にわたる商品輸送を実現しつつあったことをも示している⁽⁹⁾。

ところで、以下に掲載する「通船留書」（部分）は、天保三年三月、安食村嶋屋忠兵衛船が木下河岸地先の利根川で木下河岸の者に拿捕されたことに端を発し、木下河岸側が安食河岸に対し、川岸役銭と称する料金を旅客から徴収していること、旅客を上下船させ木下河岸での乗り替えなしに輸送していることなどを指弾した一件に関するもので、川船統制の強化に伴い既存河岸間に新たな格差が生じたこと、河岸間の紛争が物資輸送から旅客輸送へ拡大し、河岸経営の

「ソフト化」とも言うべき現象が起きつつあることなどを示唆するものでもある。

〈史料〉天保三年 竹袋村木下河岸より安食村江相掛り候通船一件

訴返書并両村始末書扣（『下総国安食村通船留書十二』所収）

（表紙）

竹袋村木下河岸より

通船一件訴返書并両村始末書扣

安食村江相掛り候

天保三辰年

安食村

乍恐以書付奉願上候

一竹袋村木下シ河岸問屋武助煩ニ付、代兼船持惣代壯左衛門并村役人一同奉申上候、当河岸之儀ハ前々より旅人諸荷物運送河岸ニ而河岸連上年々奉納、猶又安永三午年石谷備後守様河岸カ御改之節、問屋役永被 仰付、其砌り別段被 仰渡候ハ船頭船持相對積之儀ハ前々より不相成、問屋送状無之聊之荷物成共河岸揚下ケ仕候ハ、即座ニ差押江可申旨被 仰付、其節より問屋役永最寄御代官所江年々奉納、御用船并陸通り御継立、旅人諸荷物運送ニ

九州大学法学部所蔵「下総国安食村通船留書」（内田）

至迄一円相勤候処、先年手賀沼新田出来、以後近村相馬郡布佐村付江直道出来、右布佐村ニ而猥ニ旅人諸荷物船積船揚ケ致候ニ付、元文三午年奉訴上ケ候処、布佐村之儀ハ河岸場ニ而無之、御年貢津出、村用之荷物并鮮魚類ハ格別、其余之旅人諸荷物船積船揚等仕間敷旨御裁許奉請、猶又文化年中相馬郡押付新田より桃荷物積下ケ、当河岸下我俣ニ通船仕候ニ付、右船差留メ懸合中、押付新田より松平兵庫頭様江出訴被致、及出入ニ候処、押付新田之者共所之産物与ハ乍申、河岸場ニも無之、殊ニ問屋送状茂無之、荷物積送り候段越度ニ相成、依之都而上下川附村々より旅人乗セ送り之船ハ当河岸限りニ而上陸為致、旅人船相雇候得ハ、外船江乗セ替来候処、文政十亥年殖生郡安食村より掛合有之候ハ、当村之儀船渡世之者多分有之、上川筋より旅人乗セ込、帰船之節木下シ河岸ニ而其時々乗セ替ニ相成候而ハ難儀ニ付、以来安食村ニ限り御定之河岸役銭少々差出、通船致度、勿論成田参詣ニ相限り可申、其余ハ是迄之通り木下シ河岸ニ而乗セ替可申、然ル上ハ木下河岸船少ニ而御用船御差支之節、御沙汰次第居合候船々早速相登セ、御用船可相勤旨申之、依之安食村船数相尋候処、拾八艘有之候ニ付、安食村船目印無之候而ハ外村々之船ニ至迄安食村ト偽り可申与存、角板江焼印いたし、十八艘分相渡シ、成田参詣之旅人ニ限り河岸役銭而已請取、通船為致之趣、議定證文請取、通船為致候処、右船甚猥ニ相成、殊ニ当河岸旅籠屋共より旅人通行手薄ニ

相成、難儀之旨申ニ付、右議定相止メ、前々之通、当河岸ニ而乘
リ替可申旨申断、相渡置候船目印可被相返旨、去ル寅年三月中申
聞候得共、彼是申紛、右目印相返不申、然ル処、当三月晦日当河
岸下無沙汰ニ旅人乗セ下シ候船見当候ニ付、右船差留メ、船頭并
乗船之旅人国所名前相尋候処、右船ハ安食村嶋屋忠兵衛所持之船
ニ而、船頭ハ藤助与申、乗船之旅人ハ安食村勘助、長八、幸手宿
源五郎与申者之由申之、如何之所存ニ而当河岸下無沙汰ニ通船致
候哉之旨相尋候処、兼而嶋屋忠兵衛申聞候ハ、当河岸下無沙汰ニ
致通船候而茂不苦旨申付候由ヲ申、一円取敢不申、無是非右船差
留置、旅人ハ外船ニ差下シ、其段安食村及掛合候処、乗船之内勘
助、長八事ハ上川筋江之荷物積入、右商内帰リ之由申之、幸手宿
源五郎ハ下川筋江麦荷物積入シ、上乘之者之由、然ハ荷物幸領ニ
而旅人ニハ無之旨ニ而不相当之儀而已村役人一同申聞、然ハ元文
文化度之被 仰渡候ニ相振、殊ニ文化五午年御奉行所様より国々
海道筋江之再御触ニ宰領与号シ猥ニ旅人を止宿為致、荷物川下之
船江乗セ込、往来筋江不相掛様致候者ハ駈与御制禁之処、右躰不
法之儀申聞候ハ如何之存意ニ候哉、右ハ全近年安食村於渡船場ニ
渡賃之外、当河岸より乗セ下シ候旅人上陸之節、河岸役錢与号シ
老入ニ鏹五文宛無謂錢受取候由、右ハ外河岸ニハ一切無之取斗ニ
而、殊ニ船渡世之者多分有之、旅籠屋ニ而乗合出船所坏与申、看
板銘々差出シ有之、番取ニ而旅人乗船等ニ取斗、旅人河岸ニ紛敷、

益々我意ニ募リ候儀与奉存候、何卒格別之以御慈悲ヲ右嶋屋忠兵
衛并船頭藤助外、勘助、長八、村役人一同被 召出、御糺之上、
先年壮右衛門より相渡置候船目印相返并ニ上陸之旅人より河岸役
錢不請取、旅籠屋ハ差出置候乗合出船之看板相止メ、旅人乗セ下
之儀ハ御差留被成下置、都而旅人河岸ニ紛敷取斗不仕、船持共外
河岸同様之渡世仕候様被 仰付被下置度、偏ニ奉願上候、右願之
通被 仰付被下置候ハ、广大之御憐愍与一同難有仕合ニ奉存候、
以上

天保三辰年四月三日

竹袋村木下河岸

問屋武助煩ニ付代兼

船持惣代	壮右衛門
名主	喜右衛門
同	官 藏
組頭	伊之助
同	久左衛門
同	儀 八

御代官様

乍恐以返答書奉上候

一御領分安食村役人惣代名主惣右衛門日雇船頭藤助代兼百姓忠兵衛

奉申上候、当三月晦日安食村嶋屋忠兵衛船木下シ河岸ニ而差押江候儀ニ付、竹袋村問屋武助代兼船持惣代壮右衛門并村役人一同より私共外式人相手取奉願上候ニ付、当月五日 御召出ニ而願人共より奉差上候願書御読被聞、御吟味中、扱人立入、御日延任、及掛合ニ候得共、右願書廉々難聞取ニ付、御下ケ奉願上、返答書を以乍恐左ニ奉申上候

一先月廿三日、安食村勘助并長八右両人之者共同村忠兵衛船江蓑荷物船積、上乘致シ、上川筋江商内ニ罷越、権現堂問屋河岸江荷揚致、所々壳捌、則仕切書附請取之、同月廿九日右河岸場より帰船之砌、幸手宿源五郎与申者麦荷物六俵下川筋江積参リ呉候様船頭江頼ニ付、右河岸場より船積致シ、源五郎并勘助長八右三人之者共上乘致シ、同晦日昼九ツ時分木下シ河岸下通船致掛リ候処、大勢式三艘ニ而押懸参リ、無躰二船押留メ候ニ付、荷主荷船之趣申訳ケ仕候得共、何分ニ茂聞入不申ニ付、仕切状并金子差出シ、見世国所名前等委細申聞候得共、一切取敢不申、強勢ニ荷船被押留メ、剩手荒ニ船道具等迄取揚ニ相成、無扨荷船船頭共捨置、荷主斗リ便船相頼、船賃差出シ、安食村迄漸乗参申候、右ニ付竹袋村問屋村役人より旅人乗り下リ候ニ付、掛合中船差留置候趣書面ヲ以私共江及掛合候ニ付、早速右忠兵衛呼寄取調候処、同人申様ハ右之者共只今荷船被差留メ候ニ付、無扨便船相頼、私宅江乗参リ候趣申之ニ付、段々取調見候処、右奉申上候通り荷主共ニ相違

無御座候ニ付、掛合中之儀ニ付、源五郎与申荷主茂差留置、右之趣若シ紛敷思召茂候ハ、早々取調ニ御越可被成旨返書ニ加へ、且又木下シ河岸之儀ハ数度御裁許茂有之趣書入被申越候得共、私共一向相弁ひ不申ニ付、村方ニ上川稼之船々茂有之候ニ付、申附置度候ニ付、追々村役人共差遣シ候間、何卒拜見為致被下度、其上荷主等茂乗下ケ不相成場所ニ候ハ、何様ニ茂託入可申趣返書差遣シ、右ニ付早速村役人共差遣シ及掛合候処、右書物披見為致候儀ハ決而不相成、明日出訴致候趣被及断候、且又村役人不罷越以前掛合中差留置候荷船之儀ハ船宿ニ託為致、勝手俣ニ船返シ事済候儀を何様相巧候哉、此度荷主等迄相手取難儀ニ及候儀ハ乍恐重々筋違之儀与奉存候

一安食村渡船場ニ而役錢与申、鏝五文宛請取候由申立候得共、私共一向不申儀ニ付、右様之儀茂御座候ハ、取調差留可申付候、此段乍恐奉申上候

一安食村旅籠屋ニ出船乗合所杯与看板有之、旅人河岸ニ紛敷ニ付、引取可申様申立候得共、右様之看板ハ川筋一同ニ有之儀ニ付、木下シ河岸取斗ヲ以川筋一同為引取候儀ニ候ハ、安食村之儀ハ最初ニ為引取可申与奉存候、一躰安食村之儀ハ成田参詣之旅人船之便理宜敷、依之船相雇候者多分有之、自然与右様ニ相成候儀茂可有御座、併村役人ニ而聞濟取斗候儀ニハ聊無御座候、既ニ木下シ河岸より安食村迄旅人乗セ参リ、右船頭共茂日々番取同様ニ旅人ヲ

乗船致シ罷歸リ候儀ニ御座候、木下シ河岸より乗り居候船共ハ勝手俣ニ乗船為致、安食村旅籠屋共ニ出船乗合之看板有之候迎、彼是差障リ候儀ハ不相当之儀与乍恐奉存候

一旅人通船之儀ニ付、木下シ河岸右衛門与安食村船持共与相對ニ而議定有之之趣茂申立候得共、此儀ハ双方村役人共ハ存不申儀ニ付、書付木札共早々取上破談申付候、此段奉申上候

一安食村より出船不致様申立候得共、旅人船間屋与申所、木下シ河岸より川下ニハ老ケ所茂無御座候得共、鹿嶋銚子辺迄川法武拾里之間、其外西浦北浦印旛沼ニ至迄、駈与定リ候河岸場ニ茂有之間敷候得共、前々より旅人以勝手ヲ乗船致来候儀ニ御座候、既ニ於当村ニ茂御役人様方御上宿其外、御通行之砌り御荷物ハ勿論、何方江成共御乗船被申付候節ハ居合候船々江役船申付、御賃錢被下置候ハ、不殘船頭江相渡シ、其余不足之分ハ其村方ニ而足合仕、無滞動来申候、猶又御役人様方近村江御休泊之節、御乗船ニ相成候砌リハ右村々より船相雇呉候様申越候節、居合候船々役船申附差遣シ申候

一安食村之儀ハ水損之村方ニ而困窮之百姓共多分有之、依之前々川船 御役所様江御願奉申上、農業之相間ニ御極印之耕作船を以、川筋稼方仕、御年貢御上納其外之足合ニ致来候得共、近年右類船多分ニ相成候哉、稼方甚手薄ニ相成候ニ付、船持共一同困窮難儀至極仕、御年貢御上納等茂相成兼、依之一昨寅年十二月中川船 御

役所様江御願奉申上、右船御年貢并御役銀共増御上納仕、川下ハ勿論、川通手広ニ上川筋関宿辺迄、右之場所通船川稼被 仰付、尤川船御役所様より被 仰渡候通、通船之場所ハ河岸場 御議定其外も可有之哉ニ茂候間、得与河岸リ及掛合、承知致候而聊不埒之稼方無之様可仕旨被 仰渡候ニ付、去ル卯二月中船持惣代兩人ヲ以、木下シ河岸間屋方江相掛合候処、下川筋より上川筋江登リ船之儀ハ旅人諸荷物等ニ至迄、勝手次第通船可致、前々より当河岸ニ而決而差構江不申候得共、上川筋より旅人乗セ参リ候節ハ通船為致候儀決而不致趣之挨拶ニ御座候得共、此儀三拾年以前役錢杯与申儀茂無之、通船致、其後老前前ニ付、錢十二文、夫より錢拾四五ヶ年以前より拾六文宛相払、通船致来、尤其時分ハ村方船少ニ付、水戸様御領分より賃借之船を以渡世致シ、通船無滞仕候処、近年ニ相成候而ハ旅人船差留申候儀何共難得其意奉存候、既ニ上川指示境河岸之儀ハ往古より旅人河岸ニ御座候得共、庭錢口錢差出シ候得共、無滞通船為致候儀御座候、然ル処、木下シ河岸ニ限り右様之取斗ニ而船稼之者共必至与難儀至極仕、実ニ歎ケ敷奉存候、一躰木下シ河岸之儀ハ強氣之問屋場ニ而都而惡味之船頭与見侮リ、品々申掠、為及難儀ニ、此度忠兵衛船差押候始末茂甚理不俣之取斗と乍恐奉存候、右様強勢ニ被取斗候而ハ困窮之船共難儀仕候ニ付、何卒以前之通り上川筋より旅人乗セ参リ候節ハ其度々木下河岸間屋場江急度相届ケ、改ヲ請、御定之河岸役口錢

相払、無滞通船仕、外河岸問屋同様之取斗ニ仕候様被 仰付被下
置度奉願上候

右ケ条之趣、乍恐返答書を以奉申上候、尚委細之儀ハ御尋之砌り口
上を以可奉申上候、以上

安食村

村役人惣代

天保三辰年四月九日

名主 惣右衛門

同

百姓 忠兵衛

大森村

宿 茂左衛門

御代官様

始末書 扣

木下河岸

竹袋村

竹袋村問屋武介煩ニ付、代兼船持惣代壯左衛門并村役人一同申上

九州大学法学部所蔵「下総国安食村通船留書」(内田)

候、私共より安食村忠兵衛并村役人外勸助、長八江相掛り出船方
之儀奉出訴、当時御吟味中扱人立入掛り合中ニ御座候処、右相手
村方船持共一同より返答書差上、旅人船之儀御定之庭銭口銭差出
シ、当河岸下勝手ニ通船致度旨、其外三十年以前ハ庭銭不差出通
船いたし候様押而申之候由、承り驚入奉存候、当河岸衰廃ニ拘り
候始末左ニ申上候

一 当河岸之儀ハ江戸表、銚子、鹿嶋、西浦、北浦并水戸、奥州江之
船路往来有之、既ニ寛永年中之頃ハ 御公儀様より当河岸江御出
役有之、往来之旅人男女僧俗被遊御改、其後度々御出役茂無之様
ニ相成、其砌りより壯左衛門先祖問屋相勤、陸路御用御継立并出
船方迄取斗罷在候

一 延宝五巳年、常州鹿嶋郡溝口村弥兵衛与申者、下総国香取郡津宮
村伝三郎与申船頭ニ金子被盜取殺害被致候一件、御裁許之砌り、
右船頭伝三郎ハ死罪ニ被 仰付并壯左衛門先祖惣兵衛ハ急度御叱
之上、以来問屋場ニ而乗船之旅人国所名前男女等委敷相改、且船
頭身元相糺シ、庭銭口せん請取、日ノ帳江記シ、出船可為致旨被
仰渡候ニ付、当河岸より下川通り式百八ヶ村より着岸之船頭共、
其砌りより身元相糺、逸々村役人より一札請取之、渡世為致候所、
近年ハ当河岸ニ船宿与申、右船頭宿有之、右之者請人ニ相立、渡
世為致、宿無之船頭江決而渡世相断、且又当河岸出船之分ハ不及
申、通船之旅人ハ当河岸ニ而乗替、旅人并船頭国所名前相糺、日

ノ帳江記シ、出船取斗来候、然ル処、三十年以前ハ庭錢口錢不差出、通船仕候旨返答書を以申上候得共、全偽リニ而百六拾年来請取来候証拠書物所持仕候

一御用船之外、諸家様御家中御出家御社人方等ハ役船与唱ひ、村船三拾四艘之外、右式百八ヶ村より寄集り候船頭共順番を以、無否哉相勤候ハ全旅人諸荷物之運送利潤を以、是迄無滞相勤来候、然ル処、相手村方より奉申上候通、庭錢口錢而已ニ而通船為致候様成行候而ハ船頭共渡世手薄ニ相成、当河岸江詰合候船無之、御用船旅人諸荷物運送迄及難波ニ候儀ハ曆然之儀与奉存候、既ニ上川通り小堀川岸之儀ハ舳川岸ニ而御年貢御廻米其外御用荷物舳節、差支候儀ヲいとひ、御定之庭せん口錢而已ニ而ハ舳船相通不申、右ハ全寄集り候船渡世手薄ニ相成候儀を難儀与存、右様取斗候儀ニ御座候

一川上閑宿より銚子并銚田辺迄都而里数三拾四五里之間、旅人河岸与申ハ当河岸ニ相限り、其余ハ不殘荷物河岸、瀬取河岸、舳河岸等ニ而旅人乗船ハ不相成、依之旅人船之分ハ当河岸を限り与仕、則当河岸ニ而乗替来り候、別而当河岸より閑宿迄之間、布施村、布佐村、中峠村、押付新田、取手河岸、布川村之儀ハ御裁許証文内濟証文議定証文ニ而取極り、其外数通之証拠所持仕候、殊ニ船頭旅人相對之儀ハ安永三年石ヶ谷備後守様於御奉行所被仰渡有之、心得違之船頭相對ニ而旅人諸荷物等舳積候ハ、差押ひ御

訴可申上旨御請書奉差上、猶又川船御役所より被仰渡候茂川筋船之渡世之儀ハ木下河岸ヲ限り与有之、既ニ御極印切手ニも銚子、鹿嶋辺より木下河岸迄通船与御書下有之候処、相手安食村之船持共去々寅年御役銀付之御年貢上納仕度段奉願上、則閑宿迄之通船御免被成下、其節之御極印証文ニも稼方之儀ハ是迄仕来り通可心得旨被仰渡、則御請書相濟候儀ニ而船頭相對積り御聞濟被遊候儀無之、殊ニ外河岸障リニ相成候儀ハ勿論之儀与奉存候、然ハ先規仕来之通、旅人船之分ハ当河岸ニ而乗替候儀与奉存候

一安食村之儀ハ享和二戌年十月、同村庄藏与申者新規ニ間屋相成度段、当御役所様江奉願上、猶又翌亥年江戸小田原町魚問屋共ニ相馴合、銚子浜鮮魚荷物安食村より水揚致、惣深新田通、行徳河岸より舳積致度旨小田原町より当道中江相掛り、御奉行所江為相願、其砌り私共より始末申立候ニ付、右願御下ケニ相成、猶又其節式百八ヶ村数百艘之船持之内ニ而安食村ニ限ニ庭錢口錢而已ニ而通船致度段相願、且又、外河岸ニ無之河岸役錢与唱ひ、渡船場ニ而無謂錢請取、其外旅籠屋共ニハ乗合出船之看板并所ノ江之船賃附等張置候始末、旁以行々ハ本河岸場ニ取立候企与奉存候、右申上候条々得与御勘弁被成下、相手忠兵衛并村役人江御利解被仰含メ、船持共之儀ハ是迄之通、下利根川通数百艘之船同様之渡世致、村役人方ニ而ハ当河岸より乗船之旅人上陸之節、川岸役錢請取候儀相止メ、旅籠屋共ニ差出置候出船之看板船賃附等相止メ、以来

御公儀様より数度之御触書相守り都而河岸場ニ紛敷儀無之様仕度、偏ニ奉願上候

竹袋村

問屋武助煩ニ付代兼

舟持惣代

天保三辰五月

壯左衛門

名主

喜右衛門

木下河岸一件

始末書扣

安食村

安食村役人惣代名主惣右衛門、船持ニ而百姓忠兵衛申上候ハ竹袋村問屋武助煩ニ付代兼船持惣代壯左衛門并村役人中より私共相手取、差留船之儀奉出訴候ニ付、返答書奉差上候処、当時御吟味中扱入立入掛合中ニ御座候得共、訴訟方より始末書差出候ハ年来通船致来候儀を偽り、以来通船不相成候様ニ申上候ニ付、私共茂始末書を以、左ニ申上候

一訴訟方申上候ハ江戸表より銚子、鹿嶋、西浦、北浦并水戸、奥州江

九州大学法学部所蔵「下総国安食村通船留書」(内田)

之船路往來有之、寛永年中 御公儀様より御出役有之、御改仕、其砌りより問屋相勤、出船方迄取斗、問屋場ニ而乗船之旅人国所名前委敷相改、庭錢口錢請取、日ノ帳江記シ、出船為致、其外数度御裁許書議定書所持罷在、着岸之船頭中身元相糺候杯之儀ハ相違茂無之儀ニ可有御座候得共、上川筋より大川を乘下り之旅人無躰ニ陸揚致シ、為乗替候儀ハ木下河岸近年之取斗ニ御座候、則返答書ニも奉申上候通、大川乗下り之儀ハ三十年以前迄ハ木下河岸ニ而決而差構不申候処、其後より河岸役錢与唱ひ、最初ハ錢拾式文、夫より拾六文ニ相成、請取之、年来通船致来候処、六ケ年以前亥年春中大川通船之旅人押而陸揚致、始メ乗参り候船も押而被為乗替候ニ付、私共村方ハ困窮村ニ而船稼之者多分有之、殊ニ川下附之船持与ハ違、木下河岸江里数も無之所故、上川筋稼方斗重ニ仕候処、右様成行候而ハ甚難儀至極ニ付、船持共限ニ而右問屋代壯左衛門方江難心得取斗之趣数度及掛合候処、其節仕来り急ニ難差留哉、殊ニ村役人より被及掛合候而ハ不相濟与存候哉、安食村之船ニ限り通船可為致与惡味之船頭共与見侮、品能キ取拵を以、議定与申而跡方も無之儀を存分ニ書載、鑑札与名附焼印之角板与引替置、当分心能通船為致置候而一昨寅年三月中ニ至り、船持共江断被及候ハ、右船甚猥ニ相成、殊ニ当河岸旅籠屋共より差留異候様願ニ付、大川旅人乘下り船ハ決而不相成、向々断有之候ニ付、船持共も驚入候得共、先達而勝手俣ニ被巧ミ置、跡方も無之儀を

書載セ、請取、謀斗(計カ)ニ落入、今更先非後悔仕候得共、致方も無之儀ニ相成り、且又、押而通船致掛候者ハ大勢罷出、強勢ニ船道具杯迄取揚ニ被致、右様ニ被取斗、甚心外至極不得止事ニ候得共、貧窮不如意之船頭共之儀ニ付、其筋江頼立も相成兼、無坳侘人相頼、兩三日宛渡世をも不仕、日間取多分之人用相掛り候者共不少、然処、段々増長致、我意ニ募り當時ニ至り候而ハ荷物主宰領等迄被差押イ候様ニ成行、来誠ニ申上候様茂無之、難儀至極ニ相成申候、右年来役錢与唱ひ、耆人前ニ付錢拾六文相払、通船致来候儀ハ私共申立ニ而若御疑論与思召茂御座候ハ、近村川附村々御聞糺被遊候ハ、眼前ニ相分り候儀ニ奉存候、尤木下河岸之儀ハ下川筋より江戸往来上下之御用并旅人諸荷物船揚船積其外出船所之河岸場ニ可有御座候得共、上川筋両縁村々より諸用旁ニ而下川筋江乗船致候ニ木下河岸ニ而世話不致候共、聊差支無之処、河岸場ニ付、年来役錢茂相払、通船致来候得共、近年旅人ヲ上陸為致、迷惑之者ハ無坳船相雇、乗替為致候而ハ其刻限ヲ伝ひ、其上余斗之金錢等茂相遣ひ、一日ニ帰船之場所も二日も相懸り候ニ付、上下川附其外村々之者共茂甚難儀之向相聞申候、且又乍恐案申上候、海川之儀ハ別段之儀与奉存候、既ニ京大坂より東海道江相懸り候諸荷物等茂荷主勝手ニ候ハ、大坂より江戸迄上下船廻ニ相成儀、利根川附之儀茂定り候河岸場ハ勿論、川附村々之儀ハ御年貢米并村用之荷物ハ船積場ハ格別与被 仰渡茂有之、且河岸場問屋より

不差障与私共村方与ト杭新田、明和八卯年及出入候御裁許之内ニも相見ひ申候ニ付、何方之村々ニ而茂御百姓方勝手ニ付、荷物江戸廻シ之節、問屋送状茂無之、自分送状ニ而船積致来候得共、江戸問屋方ニ而ハ何茂無差支、荷物壳捌呉、江戸前問屋ニ而茂村々之御百姓方宛名ニ而送状致、諸荷物運送仕候得共、御関所ハ勿論何分河岸場ニ而も聊無差支、通船致来候、既ニ村用之荷物無滞通船致ス所ニ候ハ、川附村々之者共居村ニ而船雇、乗船相成候筋ニ相当り、然レハ河岸場ニ無之候共、船雇候者有之候節ハ、船頭ニ而得与聞糺、乗船為致候而茂不苦筋ニ候リ申候、併木下河岸より川上境河岸迄之内駈与不定河岸通より乗参ル事故、木下河岸江相懸り改ヲ相頼、河岸役錢相払、年来通船致来候儀ニ御座候一御用船之外、諸家様御家中方其外等ハ役船与唱ひ、寄集り候船頭共、順番を以無滞相勤来、然処相手方ニ而申上候通、庭錢口錢而已ニ而通船為致候様成行候而ハ御用船其外迄難涉ニおよび候様申上候得共、此儀上川筋より乗セ参り候旅人船庭錢口錢ニ而通船致シ候迎、木下河岸出船ニ拘り候儀ハ一切無御座候、殊ニ限テ旅人上陸為致候様ニも相成申間敷儀及難儀ニ、船相雇候者江ハ無坳乗替船茂差出候様ニ取斗候得ハ、詰合之船之内不足致シ可申筋、勿論下川筋より旅人乗参り候船々江戸下り之旅人乗セ帰り度ニ付、定式ニ多分之船々致番取居候ニ付、乗詰ニ致候得ハ、式三拾人宛も乗込ニ相成所、番取船年增多分ニ相成候ニ付、人数老艘毎四人

乗与定、出船為致候儀ニ御座候、右様之所御用船其外ニ差支候杯与申上候儀ハ皆式偽之儀与奉存候、且又小堀河岸舂間屋之形ヲ申上候得共、此儀ハ江戸より木下河岸江往来之旅人脇道江廻リ、布佐村哉六軒新田ニ而乗船致シ、木下河岸ヲ御定之庭錢口錢而已ニ而通船致為間敷儀ニ相当リ、右小堀河岸も下川筋より登リ船積荷物一式之舂河岸場ニ而候間、右様茂可有御座候得共、上川筋兩縁より乗船致候旅人大川通船より庭錢口錢相払候仕癖ハ全木下河岸間屋場之威徳与存候、既ニ東海道宿場ニ而茂口錢合い払候得ハ何方迄成共勝手ニ繼通相成儀ニ候、利根川通船之儀ハ東海道ニ茂相勝リ可申与存候

一 訴訟方ニ而川船御役所より被 仰渡候茂川筋船々渡世之儀ハ木下河岸ヲ限と有之御書下ケ有之趣申上候得共、是ハ全耕作船之事ニ而、長錢五百文位之御上納ニ而木下河岸より川下之船ハ農間ニ右河岸より銚子鹿嶋辺迄稼方之御議定被 仰付置、尤木下河岸ヲ限リ与ハ一切無之候、右様手狭ニ稼方之船故、一昨寅年船御改之以前迄ハ私共村方ニ式艘ニ限り所持仕候、其余之茶船ハ不残 水戸様御領分より賃借之船ニ御座候所、御改後同年十二月中、川船御役所江御願申上、上下川銚子鹿嶋辺より川上関宿辺迄通船川稼被 仰付、請印相濟候得共、仕来之通杯与申候文言之請書ハ決而差上不申儀ニ御座候、以前下川筋ニ而旅人諸荷物共積請、通船稼方致シ来候ニ付、上川筋も同様ニ稼方仕候

一 境河岸より木下河岸迄里数十六里之間、両縁村々ニ而茂前々より旅人勝手を以乗船致来候儀ニ御座候、右木下河岸より銚子迄拾八里之間茂右同様ニ仕来申候、此儀仮令ニ佐原村より早速潮来鹿嶋銚子辺江諸用有之乗船致度時分、木下河岸江船相雇ニ参候者茂有之間敷儀、且右場所其外より旅人日々乗船致シ木下河岸江着岸致シ居候船頭共茂不残相對積を致シ参、問屋場ニ詰合居候ハ其俣差置候哉難心得、木下河岸之船頭共迎茂別段之儀ハ有之間敷与存候一 先年私共村方庄藏与申者、新規問屋株願出候趣申上候得共、此儀ハ本道江不掛、新道繼送之願ニ付、往々ハ旅人其外迄通行ニ相成候而ハ御伝馬道往来繼場ニ差障候筋ニ付、御間濟茂有御座間敷候得共、安食村之儀ハ外村与ハ格別前々より之繼場ニ而、殊ニ木下河岸同様之河岸場 御高札等茂從 御公儀様御掛ケ被置候村方ニ候得共、安永度ニ願後ニ罷成、併筋ヲ以申立仕候ニハ願濟ニ茂相成可申哉与存候

一 渡船場ニ而無謂錢請取候様訴訟方ニ而奉申上候ニ付、先達而帰村之節、村方ニ而取調仕候処、全役錢杯与申儀ハ決而無御座候、安食村渡船場之儀ハ御存知之通場狭ニ御座候、右渡船場ニ而御役人様方其外御荷物等ニ至迄、前より御繼立取斗仕来候場所ニ御座候、猶又川向ニ出作地高式百石余有之、右田畑作物等迄渡船仕来之場所ニ付、旅人船等着船為致候而ハ渡船之差支ニ相成、甚及迷惑ニ、殊ニ御役人様方御揚之御場所江旅人共無弁茂小へん杯致シ子供杯

乗セ参候節ハ大べん迄為致、甚渡守難儀仕、依之掃除せん申而旅人よりは是迄少々宛貫来、尤木下河岸之者御同領之者よりハ一切相貫不申候、併木下河岸ニ而差障候儀ニ候ハ、以来掃除銭相貫申間敷候間、旅人船茂渡船場を相除候様可被致候、掃除ニ甚以困入候趣渡守願ニ付、何卒旅人船向後渡船場ヲ相除キ船附候様為年御申聞被下度奉願上候

一旅籠屋共ニ而乗合、出船之者看板其外引取候様申上候得共、此儀ハ致而差障不申様之返答書奉差上置候ニ付、得与御勘考之上、御取扱奉願上候

一安食村之儀ハ御伝馬其外御継立之村ニ而人馬ハ勿論、御役人様方御休泊旁ニ而村入用等多分相懸リ候得共、成田参詣之旅人之助成より外ハ無御座候、既ニ佐原、鹿嶋、銚子辺江之旅人ハ不残木下河岸迄上下乗船ニ有之候、扱又滑川江道法三里之継合ハ御用御伝馬而已ニ而旅人通行ハ無之、其外寺台、木下、生板右四方江之継立場ニ而外継場より余斗^(計九)ニ村入用茂相懸リ、猶水損旱損之村方ニ而困窮人多分有之、因茲農間ニ船渡世等致シ、御年貢其外之足合ニ致シ、其上成田参詣之旅人も木下河岸と印旛沼縁大竹村与何様馴合候哉、是迄旅人船揚茂致シ不来候大竹村江旅人を進メ乗船為致候、大竹村ニ而ハ木下河岸江出船所与定杭建置、兩村ニ而近年乗船專ニ取斗候ニ付、近年ハ成田参詣之旅人通行甚手薄ニ罷成、旅籠屋共ハ勿論、馬持其外百姓共も一同難儀仕、往々ハ村方衰微

仕、御伝馬役其外不勤様ニ成行候而ハ甚難儀至極ニ罷成候ニ付、何卒御憐憫之御取斗を以、向後成田参詣之旅人木下河岸より沼内大竹村江乗船不致様ニ、得与御理解申含候様御慈悲之程偏ニ奉願上候

右訴訟方ニ而申上候慮々其外、始末書を以申上候間、得与御勘之上、右壯左衛門并村役人中江御理解被申含メ、上川筋より旅人大川乘下り候節ハ御定之庭銭口銭仕来ヲ請取、前々之通無滞通船為致、旅人之難儀ニ不相成、困窮之船持共茂船渡世相成候様、右ハ御議定書茂無之ニ勝手俣ニ村限之取斗不仕様、猶又沼内大竹村江旅人船差出不申様都而御公儀様より前々被仰出候通、先規仕来相守、惣而新規之儀相企不申様外河岸問屋同様之取斗仕候様ニ篤与御理解御申被含メ候様奉願上候、猶委細之儀ハ御尋之砌、口上ニ而可申上候、以上

安食村

天保三辰年五月八日

村役人惣代

名主 惣右衛門
百姓 忠兵衛

乍恐以追返答書奉申上候

御領分下総国殖生郡安食村役人物代名主惣右衛門、船持ニ而百姓忠

兵衛奉申上候、木下河岸下利根川通船之儀ニ付、同国印旛郡竹袋村問屋武助煩ニ付、代兼船持惣代壯左衛門并村役人より私共相手取、当辰四月中奉出訴候ニ付、其節御 召出ニ御座候間、返答書奉差上、依之双方御吟味中御日延任、扱人立入候ニ付、猶私共より始末書差出シ掛合仕候処、内濟ニ相成不申、当時帰村被 仰付置候得共、通船之始末、私共而已ニ而奉申上候而ハ格別御聞濟茂薄可有御座哉与奉存候ニ付、近村川附村々より旅人通船之始末帳面ニ認相貫申候間、乍恐奉差上候、猶又利根川筋ニ而境河岸之儀ハ往古より旅人乗船之河岸場ニ而御座候間、右問屋中江河岸場之始末書状を以問合仕候処、左之通返書ニ御座候

一他所より参り、当河岸江相懸リ居候船江下行其外江参り候旅人有之、右之船江乗船ニ相成候節ハ、右之船より拙者共方江口銭差出、致出船申候、当河岸より乗船不致、外河岸より乗合相拵、当河岸前致通船候得ハ仮令見懸リ候而茂河岸場江引附為乗替申候哉、又ハ口銭取候拵与申候儀ハ一切無之候右御問合ニ付、貴答此如御座候、以上

六月十四日

境河岸

青木兵庫

小松原五右衛門

右ハ境河岸仕来之取斗方ニ御座候ニ付、木下河岸之儀茂右ニ順シ可申筋ニ御座候、則書状之写乍恐奉差上候、尤右問屋判居置候ニ

九州大学法学部所蔵「下総国安食村通船留書」(内田)

付、御用之節ハ可奉差上候

一文化年中桃荷物積下船之儀ニ付、押付新田与竹袋村木下河岸及出入候始末、訴訟方より奉申上候得共、此儀右押付新田之儀ハ川附村ニハ無御座候、内郷村ニ御座候ニ付、其節越度ニも相成候哉ニ奉存候、此段乍恐奉申上候

一川附村々高瀬船之儀、江戸并上州野州辺より帰船之節ハから船ニ付、川筋ニ而問屋并船宿其外ニ而旅人便船被雇候節ハ前々より乗せ、以来木下河岸下大川筋無滞通船仕来候処、一昨寅年より高瀬船迄下り旅人船差押、致陸揚候ニ付、私共村方ハ勿論、川附村々ニ至迄甚難儀之趣ニ御座候、都而利根川筋上州野州辺より江戸川通船而通船之船々旅人乗船并諸荷物積請、人々乗船等ニ至迄、通船差押、致陸揚候河岸場問屋場ハ外々ニ一切無御座候得共、近年木下河岸ニ而下旅人船其外迄差押、致陸揚候ニ付、村々之者旅人并船持共迄一同甚難儀至極ニ相成申候、右之段乍恐村々并問屋中より相貫申候始末書相添奉差上候間、何卒御慈悲之御勘弁を以、猶御吟味之上、旅人船其外共木下河岸ニ而不差障、前々之通無滞通船相成候様外河岸問屋同様之取斗仕候様ニ被 仰付度、此段奉願上候

右ヶ条之趣、乍恐以追返答書ヲ奉申上候、猶委細之儀ハ乍恐御尋之砌り口上を以可奉申上候、以上

安食村

九州大学法学部所蔵「下総国安食村通船留書」(内田)

天保三辰年六月

村役人惣代

名主 惣右衛門

百姓 忠兵衛

大森村

宿 茂左衛門

御代官様

付記

本稿記事を著述等で利用される方は典拠を明示され、その成果一部を所蔵者及び千葉県立中央博物館あて寄贈されたい。

未筆ながら、本史料の閲覧及び収集に種々御便宜を賜った九州大学法学部研究室主任吉村先生、同学部図書掛各位ならびに同大学文学部丸山雍成先生、茨城県旭村皆藤家文書について御指導賜った茨城県立歴史館川俣英一先生、高橋実先生に御礼申し上げます。(本稿は平成4年度グループ研究「房総史に関する古典籍の研究」(研究代表者 内田龍哉)の成果の一部である。)

註

- (1) 丸山雍成「近世河川交通史の一断面(一)利根川木下河岸を中心として」(『九州文化史研究所紀要』第三十四号、一九八九年三月)
- (2) 元禄三年「国々所々御城米運賃改帳」(伊能家本)の記事は、左のとおりである。なお、典拠は川名登『近世日本水運史の研究』第三章第二節付載によった。

同断(下総利根川一筆者注)

安食

一、源 田川岸 川道四拾貳里 運賃三分貳厘外壹分八厘減

西大須賀

是ハ御定ノ運賃ニ而積申候

設楽勘左衛門

瀧野十右衛門

成瀬五左衛門

- (3) 天明六年「下総国埴生郡安食村御差出明細帳」米町役場『米町史資料集(一)』十八頁所収及び『角川地名大辞典十二 千葉県』六三頁以下による。

- (4) 川名登『日本近世水運史の研究』(一九八四年十一月)第三章「江戸幕府の内陸水運政策」参照

- (5) 拙稿「駄賃馬稼ぎと耕作船―近世中後期における利根川水運の変質をめぐって―」(『千葉県立中央博物館研究報告(人文科学)』第3巻第1号所収、平成五年三月)

- (6) 茨城県鹿島郡旭村皆藤家文書(茨城県立歴史館所蔵)による。なお、茨城県立歴史館『鹿島郡旭村皆藤家文書・東茨城郡茨城町木野内家文書目録』(一九九二年三月)を参照されたい。

- (7) 茨城県史編さん委員会『茨城県史料 近世社会経済編IV』(平成五年三月)二六二頁所収。

- (8) 前掲『茨城県史料』解説は、安食村を常陸国新治郡安食村(茨城県新治郡出島村)としているが、ここで言う安食村とは、飯沼街道の継場である常陸国鹿島郡子生宿から江戸向け鮮魚荷物を継ぎ立てていることから、筆者は下総国埴生郡安食村と解釈した。

- (9) 幕末から明治初年における駿河国焼津湊においても、人馬や大八車によって、鮮魚荷物を小田原や浜松まで陸送したことが知られている。(焼津水産会編『焼津水産会沿革史』大正八年)

(千葉県立中央博物館 歴史学研究所)